

頑張らないで

大野優凜子

雑誌で人生相談を執筆している 仕事柄、二十代から三十代の働く女性の悩みに触れる機会が多い。働く女性の悩みといえば、先ずは職場での人間関係である。職場での人間関係の構築は難しい。価値観が違い、理解できないからといって、友人のように関係をなくしてしまおうわけにはいかない。仕事の愚痴を聞かされるばかりでウンザリする。上司の悪口に同調しないと機嫌が悪い。プライベートを詮索される。セクハラまがいの言動がある。仕事をこなしても認めてもらえない。強引に一言で括ってしまえば、「あの人は合わない」「と」という悩みである。合わないなら放っておけばいいものだが、相手を嫌う感情が伝わると、電話を取り次いでもらえなかったり、仕事の指示を与えられなくなったりする。「こんな人と一緒に働きたくない」「でも、やらなければならぬ」という相反する思いにとらわれ、バランスを失った心は收拾がつかなくなる。

仕事内容に意義が見出せず、毎日同じような仕事の繰り返しに疑問を感じながら、何年経っても男性社員の補佐的な仕事しかしていない女性もいる。充実感が得られない。自分の能力が活かせていないかもしれない。本当に、この仕事を続けていていいのだろうか。

今の女性は、職場を結婚までの腰掛などとは思っていない。働くことは恋愛や結婚とは別な大きなものと捉え、やり甲斐を求め。職場の中に、自分の存在価値を見つけない。だが、現実には厳しい。「このままではいけない」「でも、どうすればいいかわからない」。葛藤を抱えながら、解決の糸口を見つげられず、堂々めぐりの一日が過ぎていく。

身体と同じように心も疲れる。ときには休ませ、栄養を与えなければ、知らないうちに疲れがたまる。明るく積極的に物事に取り組み、元気といわれる女性たちこそ、実は疲れきっている。

そんな彼女たちと話すとき、私は「頑張つて」と言わないことを自分に課している。口にしやすすい言葉であるが、疲れた心に、これほど空疎に聞こえる言葉もない。頑張らなければならぬのは、彼女たちがいちばんわかっている。わかっているから頑張っている。それでも抱え切れずに、誰かに吐き出したくなる。そんな彼女たちには、「頑張つて」と背中をたくより、「頑張らなくてもいいよ」と、優しく撫でてあげたほうがいい。

そして、実はこの思いは、働く女性だけに限らない。毎日繰り返される家事に、ときに疑問を抱き、ときに空しさを感しながらも、笑顔で乗りきろうとしている主婦たち。働く女性が、懸命に仕事をこなしても上司に認められずに嘆くように、家の中をピカピカに磨

きあげ、旬の素材で美味しい料理を作っても、家族から「ありがとう」の一言もない。「私はいつたい、何をしているのだろう」「このままでは、社会から取り残されてしまう」「どうすればいいのだろう」「焦りや空しさが彼女たちを襲う。家族のために働き、疲れ果てて帰る夫に、たよりりたいし、甘えたい。が、心配をかけてはいけないと抑えてしまう。思い切つて吐き出そうとすれば、夫とタイミン

グが合わない。どこにも持って行き場のない思いを抱え、それでも頑張りつづけている主婦たち。

心の疲れは、誰にも見えない。本人にできえ、わからないときもある。だから せめて、休日には自然に抱かれてほしい。

緑濃い山々を仰ぎ、薫る風を首筋に感じ、宝石のようにキラキラと光る海を見つめてほしい。疲れた瞳のフィルターが替わり、新しい景色が見えてくる。

視点が変われば発想も変わる。
私たちが住むこの国は、海も山も優しい。